

郷土館だより

Vol. VI No. 1

1983. 7. 1



メリーさん (三四呂人形・野口三四郎作)

目次

郷土館テーマ展 三四呂人形展……………	1・2
父と娘の往復書簡 (日清戦争の舞台裏) ……	3・4
展示資料紹介 (建築儀礼) ……………	5
行事報告・収集資料紹介……………	6
国立歴史民俗博物館を見学して・利用案内……	7

郷土館テーマ展、三四呂人形展

郷土館では、今秋のテーマ展を、三島出身の人形作家野口三四郎と三四呂人形を題材に、開催する運びとなりました。

期間 10月7日(金)～11月30日(水)
 会場 郷土館 一階 テーマ展会場
 主な展示物
 三四呂人形 「水辺興談」「官妓」
 「姉妹」「影ふみ」等30点
 スケッチ・版画・人形木型等
 講演会 期間中 1回予定(日時・講師未定)

三四郎没後、約半世紀となり、遺作の三四呂人形も、散逸し、三四郎を知る人も少なくなりました。三四呂人形を市の文化財に指定して、永久に保護しようという動きのある中で、野口三四郎をテーマにとり上げる事は、大きな意義のあることと思われまます。

野口三四郎

三島市大中島(本町)出身の人形作家である。明治34年(1901)誕生のため、三四郎と名付けられた。後年「三四呂」と称す。三四呂人形という名はここからきた。

葦山中学中退後、写真家を目指し、昭和初めには東京三越の早撮り写真師となった。4年頃朝鮮に派遣されたのが生涯の大きな転機となった。半島に長期滞在し、朝鮮風俗・風景のスケッチを多数残した。芸術家魂が目覚めたのである。

帰国後、三四郎は張り子人形との出会いにより、人形製作に、彼の心情表現を託すようになる。スケッチを基に朝鮮風俗の人形を作り始める。もとより、人形で生計を立てられるはずもなく、兄の援助で、写真館を始めたものの、夜は人形製作に没頭する。厳しい生活の中で、こよなく夫を助けた妻しげさんが、次いで愛娘桃里ちゃんが3歳で病没した。三四郎の嘆きは深く、一人伊豆大島へ旅立ち行方をくらましたこともあった。悲しみの中から、ますます人形製作に傾倒し、異国情緒あふれるものから、日常の子供の遊びを扱ったもの、家族の愛情を表わすもの、娘桃里をしのぶものと、題材が変化する。技法も当初の張り子、胡粉塗りから紙塑人形、石膏人形へと変化し、三四郎独特の、表面に和紙をあしらひ、淡い彩色の、あたたかみのある人形を完成する。

仲間には、人間国宝鹿兒島寿蔵・同、掘柳女・野口光彦という現在著名な人形作家がおり、4人で甲戌会という人形作家グループを組織し、作品を発表しあい励ましあった。昭和初期は人形芸術運動が盛んになった時期で、甲戌会は、その最先端を担っていたのである。

昭和11年第一回人形芸術院展(会場白木屋)にて、出品した「水辺興談」が人形芸術院賞を授賞する。三四郎の晴れの舞台であった。しかしこの直後に結核を発病、三島に帰郷して療養するが、翌12年没する。37歳の若さであった。

代表作 「水辺興談」、「子供の四季」、「磯」
 「姉妹」「影ふみ」「官妓」など。

野口三四郎 年譜

- 明治34年 三島市大中島(本町)の質屋の次男として生まれる。(父達之助、母よね)
- 大正10年頃 葦山中学中退。東京で写真の見習いを始める。
- 昭和3年 東京三越の早撮り写真に入る。ここで妻しげさんと知り合う。
- 昭和4年 朝鮮京城博覧会に早撮り写真師として派遣される。三越を退社。
- 5年 上北沢に移り、人形製作に没頭する。12月長男冬樹生まれる。
- 6年 渋谷区笹塚に移り、野口写真館を開業。甲戌会の人々と交流盛ん。
- 7年 3月桃里ちゃん誕生。
- 9年 6月妻しげさん死亡(25才)
- 10年 中野に移る。5月桃里ちゃん死亡(3才) 杉並区高円寺に移る。
- 11年 6月第一回総合人形芸術展、人形芸術院賞受賞。この直後結核にかかる。三島へ帰郷、大中島に住む。
- 12年 1月22日死亡(37才)
4月、三島にて、故野口三四郎遺作三四呂人形展開催(丸屋呉服店2階)
- 32年 三島母の会、三四呂人形の複製、製作販売開始。
- 40年 6月 三四呂人形展(伊豆民俗館)



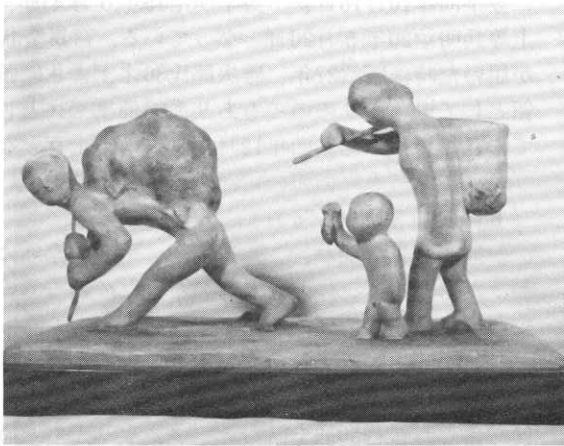
官 妓 (朝鮮の舞姫)

朝鮮風俗を模した代表的作品。三四郎の初期のものとして推定される。この官妓のデッサンと写真は数多く残っており、三四郎が、強く印象づけられた題材であった。顔立ち・服装にエキゾチシズムを感じさせる。この作品は、他の人形作家、特に鹿児島寿蔵氏に影響を与えたとされている。



ハチ公

渋谷駅前の忠犬ハチ公を模したもの。三四郎の手にかかると、銅の犬が、たちまち生気を帯びてくる。童女の手招きに、尾を振ってじゃれつきそうなハチ公である。この作品のため、何日も渋谷に通いつめたという。愛らしい一対の人形である。



磯

厳しい漁村の生活の中で、豊漁の帰路は心躍るものであった。漁獲物を背にする父、重いかごを背負いながら、子の話に目を傾ける母、父母の間を、小魚を手を持ってはしゃぎまわる子。親子の信頼と愛情があふれる、心暖まる作品である。三四郎は、人形製作の初期、漁村に泊まり込んで、スケッチしたという。そのスケッチを基にした作品であろう。



水辺興談

三島は古くから水の都として知られ、三四郎の生家の裏にも、とうとうと源兵衛川が流れていた。そこでは、はややうなぎがとれ、子供達のよい遊び場であった。これは、近所の子が、とったばかりの魚を手し、川岸で一休みして、自慢話をしている場面であろう。古き良き三島をしのばせる作品である。(昭和11年、人形芸術院賞授賞)

(福田)

父と娘の往復書簡

(日清戦争の舞台裏)

「君沢郡三島町 後備役工兵 安藤雅次郎殿」宛の一通の書簡が届けられたのは、明治27年8月4日、午後3時を少し過ぎた時であった。発信先は「静岡県君沢郡三島町役場 三島町長三浦丈八郎」である。

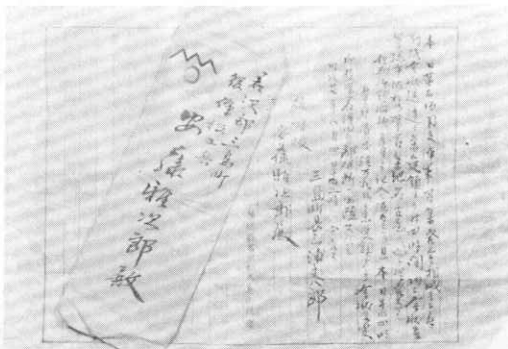
この一通の書簡によって、安藤家の戸主雅次郎氏と彼の家族は戦争という国家の一大事件の渦中に否応なく巻きこまれることになった。

届けられた書簡は召集令状であった。令状の全文は次のようである。

「本 日第三師団後備軍召集発令相成候ニ付
別紙令状送達候条御受領ヨリ廿四時間内ニ令状
並軍隊手帖携帯召集地名古屋へ向ケ出発スベシ
但別紙領収証へ年月日ヲ記入シ返付スベシ且
本 日午後四時 分ヨリ旅費支給可相成候条
受領トシテ令状並実印携帯君沢田方郡役所へ
出頭スベシ
明治廿七年八月四日午後三時 分発
三島町長三浦丈八郎 (印)

後備役

安藤雅次郎殿



いわゆる「日清戦争」と言われる歴史的事件を『日本史辞典』をひも解いて要約すれば、次のようになる。資本主義の発展途上にあつた日清両国は、1875年(明8)の江華島事件以来、朝鮮半島を舞台に、両国の政治的・経済的(綿布市場)摩擦をくり返していた。当初こそ日本の優勢は続いたが、李鴻章の率いる清国は、次第にその勢力を増してきた。圧迫された日本は、綿織物業の擁護を名目に、国内の反政府勢力を一気に国外に向けさせようと、たまたま起つた東学党の乱を口実に朝鮮出兵を断行した。清国との強引な交渉も決裂

し、7月25日開戦の第一歩をふみ出したのである。この戦争は平壤・黄海・大連・旅順などで大規模な戦闘を持ったが、いずれも日本の大勝利に終り、下関条約が結ばれた。後、三国干渉が加わることにより、列国の清国侵略が進むことになる。

雅次郎氏への召集令状は、こうした歴史的背景があつて舞いこんだものだった。

雅次郎氏が生れたのは元治元年(1864)である。明治14年(1881)みねさんと結婚後、夫婦養子として安藤家に入籍した。満17才の時であった。養父の安藤伝兵衛は、三島でも指折りの建築請負師であり、伝兵衛の腕は広く知られているところであった。当時龍沢寺老師であつた星定師にもその腕前は買われ、経蔵(六角堂とも呼んでいた)なども手掛けている。おそらく明治10年代の初めの頃だろうと思われる。その頃龍沢寺に参禅し、そこで数多くの仕事を残した左官の名人伊豆の長八とも交流したらしいのである。現在安藤家には長八の描いた「太子像」等の作品が伝えられている。このような養父伝兵衛の下で厳しく腕を磨いた雅次郎氏も、いつしか「頭領」と呼ばれる働き盛りの請負師として育っていったのだった。一方雅次郎氏の兵役の履歴も年とともに変つてきた。陸軍省工兵科手帳によれば、入隊は明治18年4月24日、二等卒同年10月16日、一等卒明治19年6月4日、上等兵明治20年5月20日となっている。召集令状が届いた時は明治27年、雅次郎氏30才、まさに頭領として働き盛りの頃でもあり、後備役工兵としての召集であつた。同年12月7日には下士官となり、給与も一挙に従来の倍額支給となっている。

(6円6銭8厘=1ヵ月)

一通の召集令状が、ごく普通の、平和な家庭に与えた影響は、一体どんなものだったのだろう。安藤家には当時の状況を語る人は誰も居なくなった。しかし出征して行つた雅次郎氏と残された家族や友人達との間で交わした書簡が残っていた。はがきと封書約50通を読むと、多少なりとも当時の人々の心情が解る。否、むしろ残っている書簡が明解な歴史の証言であることを知る。雅次郎氏みねさん夫妻の間には、当年10才になる娘ごとき(故人・昭和53年95才で亡)が居た。かわいい盛りの尋常小学校の児童だった。父雅次郎氏にとって、仕事よりも何よりも娘と別れることは辛かつたに違いない。ことさんにしても同じである。幼ない心に、突然の父不在は、この上ない大きな不安感を与えたものであろう。

以下、この父と娘が交した2通の書簡を紹介してみよう。戦地で娘を思いやる父、内地で父を慕い、甘える娘。二人の往復書簡は、当時の状況を何よりも雄弁に語っている。

父へ（明治28年2月13日）

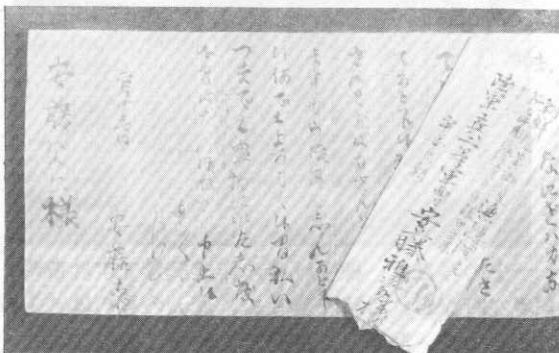
宛先 朝鮮国黄海道漁隱洞 第三師団後備工兵第一中隊第二小隊五分隊
陸軍工兵二等軍曹 安藤雅次郎様
平安御報

発信 静岡県伊豆国君沢郡三島町 宇田
二月十三日 安藤こと之女記

「久々うちたへ如何とあん志居ました 去一月十九日出てのがみ当二月十三日はがき二枚とも相とどき 拝見仕候へば 一月三日よりてきにむかひきづをうけたるよし 志きによくなり候よし 御目出度ぞんじ候 本月十一日同十二日威海へ占領志たるゆへ 大まつりをしま志た 見物人ハ三島中へ一ぱいになりました。こんなにぎ八（や）かな事ハ始てをぼえました さて此上ハ御身を大切ニ志て可被下候 私し事ハ お志いさんとおばあさんと見てくれますから御あん志ん可被下候 何でもよろしく候間 私いつまでも宝物にいた志度候間（何か御送り被下度一母みねさんの加筆と思われる一）御ねがい申上候

あらあら かしこ

二月十三日 安藤 こと
安藤父上様



娘へ（明治28年4月5日）

宛先 田町 安藤琴子へ
発信 支那国金州半島 大連湾にて
陸軍工兵二等軍曹 安藤雅次郎

※ 娘ことさんへの手紙は、宛先が田町だけとなっている

ところから、家族への書簡に同封して送られたものと思われる。

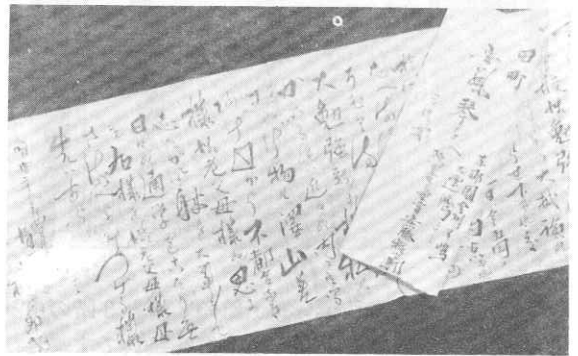
「一寸申上候 ことさんにも益（々）学校御勉強の由目出度申をさめ候 大試験の点数御しらせ下され度 点数ニより先日ハ金五円ノをびと申送候得共高点なれば拾円も其余も出して買あたへますから 母の申事をそむきまじく せいぜい大勉強致す様 私もかいる（帰る）のハ近々の内ニ候間みやげ物も沢山差あげ（マス。）から不都合なき様御老父母様の恩に志たがい体を大事にして日々の通学をこたり無候 右様を御老父母様母さまへよみつげる様

先ハあらあら かしこ

明治二十八年四月五日

清国にて 雅次郎拜

娘こと子へ」



以上の2通が、日清戦時下における父と娘の往復書簡である。戦時下とは言え、明治28年に入ったこの頃は勝敗も見えてきていて、手紙の内容にもいくらか余裕がうかがえる。ことさんの便りには、占領のニュースに湧く三島の町の様子が父へ報告されている。帰国が近い戦地の父へ、何かおみやげをとねだっている下りも、いかにも可愛らしい。一方父雅次郎氏の手紙には、ほうびの帯でことさんに勉強をすすめているのは、明治の頃にしては以外なことのように思える教育パパ振りである。

しかしながら、二人のこうした文面の底にあるものは、父が子を、子が父をと思う親子の情である。戦争、出征、そして親子の別れという事件が、二人を更に強い愛情で結んでいたのに違いない。

（杉村）

（資料提供 三島市北田町 安藤伝七郎氏）

■展示資料紹介■

建築儀礼 (けんちくぎらい)



写真は、この4月から郷土館の2階と3階の中間の階段踊り場に展示した建築儀礼祭具です。これを作り、寄贈し、さらに展示作業にまで骨折って下さったのは、三島高等職業訓練校の関係者の皆様です。

展示した祭具は、ぬさ5本、天地を射る弓矢1対(雁股矢、鏑矢)、尺棒1本、幣、棟札です。ぬさと弓矢には竜や鳳凰などの彩色を施された絵がらがついています。このような立派な祭具は、一般的な家屋の建築においては用いられず、また現在では余程の大建築でなければ見ることはできません。

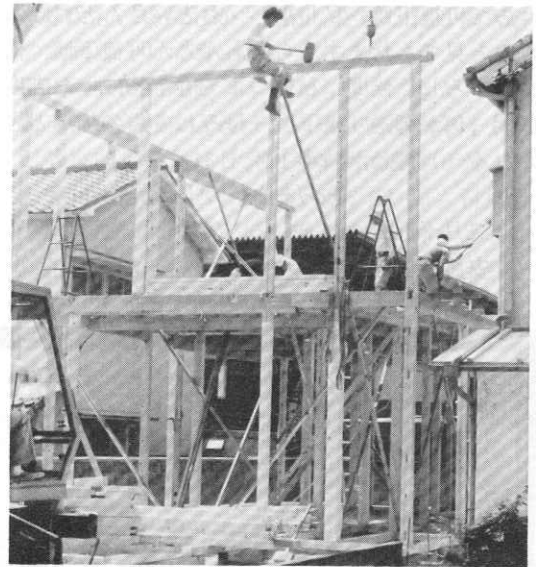
元来、建築に際しての信仰や習俗は、普請の過程において、大工や施主、親類、共同労働の人々の間で、新築される家の繁栄を祈願して素朴な形で行なわれてきたものでした。ところが次第に種々の思想や占い等が入りこんで、近世以降には儀礼の形式ができあがりました。特に明治以後になると、社寺建築だけでなく庶民の家屋建築にも、はでな儀礼が行なわれるようになりました。



上の写真は、市内で撮影した「地祭り」の風景です。

普請にあたって最初の儀礼となります。普請地に竹を立て、注連繩をはって神職に祓い清めてもらいます。式には施主をはじめ、頭領などの建築関係者、親類が参列して行なわれます。

昔は地祭りの後に、柱の立つ場所を突き固める地搗きが行なわれたものでした。鳶職が組んだやぐらで搗き棒を降りおろし(ヨイトマケ)、地搗唄などを唄ったと聞きます。



上の写真は、棟上げ前の作業風景です。(市内)現在行なわれる建築儀礼で、最大のもは「上棟式」です。展示した祭具のようなはでな祭具こそ一般では用いないが、鬼門に向けて弓矢を作り、大工が天地四方の神を拝して銭や餅をまいたりの行事は続いています。

古く東北や九州などでは女の髪や髪道具を供える習俗があると言われますが、三島地方の昔はどうであったか知りたいものです。

(杉村)

■行事報告■

草木染講座を終わって

3月26日(土) 恒例の草木染の講座を実施した。講師は、井上一雄先生、草木染めと織物を研究されている。受講生20名募集のところ3倍以上の申し込みがあり、私達をあわてさせた。

今年は、「もみじ」で染めるということで、昨秋、楽寿園内のもみじをかき集めておいた。25日井上先生宅で、あらかじめ染液を作っておいた。アルミの大ナベに沸かした湯の中にもみじを入れ煮たさせる。半日の大仕事であった。

翌26日、染色は初めてという受講生20名が、井上先生の指導のもと、布を染液と媒染液(色を定着させる役割を果たす。今回は、石灰と硫酸第一鉄を使用)浸す。とたんに歓声がわき起こった。真っ白な布が、からし色と鼠色に変わったのだ。魔法のような変化に、皆女学生のような喜びよう

であった。井上先生のあたたかい声がとぶ「染液と媒染液に交互に何回か浸して下さい。布に、空気を含ませるよう、布をはたいて下さい。小一時間も干すと、もめんの布はすっかり乾き上がった。郷土館前で記念撮映(一写真)、文明社会の中で、自然の持つ不思議さに触れた喜びは大きかった。

(福田)

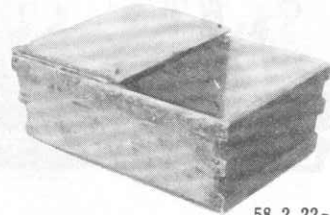


■収集資料紹介■

楽寿園西門前の野口さん宅からコメビツ(米櫃)を寄贈していただいた。家を新築するため、古いコメビツは御用納めとなって、郷土館にやって来たわけだ。深さ31cm、たて89cm、よこ59cmの長方形で、板の厚さは1.5cmもある。使いこまれたその姿を見ていると、心からご苦労さんと言いたくなる。おそらく一世紀近くの間、野口家の台所を眺めてきたのだろう。

米ビツの管理は、主婦の権利であり、家の経済に応じて米を貯蔵しておき、主婦がマスや椀など

で米をはかって出したものである。嫁が来ても、米をはかって出す権利は主婦が持つという地方もあったようだ。米ビツの管理は主婦権の象徴であり、主婦権を渡すことを「米ビツを渡す」とも言ったと聞く。時代が変わって、野口家の新しい家には新しい米ビツが入るのだろうか。(杉村)



58.2.22~58.6.1

採取日	提供者(住所・氏名)	資料	点数
58. 2. 22	市内松本356 田辺幸雄氏	千石通し、ブツタイ、軍馬用クラ、カーバイトランプ、ひよこ飼育用保温器、苗とり器、牛馬飼料用具、オヒツ保温器、マチアミ(民具)	9点
"	"	"	"
58. 3. 16	沼津市千本緑町1-1	支那通史、等書籍類(含図)	48冊
58. 3. 23	市内北田町7-14 杉山峯氏	修業証書、卒業証書、賞状、感謝状、表彰状、精勤賞、写真、外モモヒキ、ハラガケ、消防ハッピ、ズキン、洋服、箱(民具)	32点
"	"	"	"
58. 3. 26	市内加茂川町12-55 弓田慧氏	教科書、等書籍類	21冊
58. 4. 14	市内泉町9-9 鈴木保子氏	粃すりうす、精米用つきうす、たて杵(2)(民具)	4点
58. 4. 30	市内文教町 三島高等職業訓練校	ミシン(シンガー)(民具)	1点
58. 5. 1	市内南町3-14 黒川健夫氏	上棟式祭具(民具)	一式
58. 5. 28	市内大宮町3-11-2 近藤氏	たらい(民具)	1点
58. 6. 1	市内一番町 緒明太郎氏	たて杵(民具)	3点
58. 6. 1	市内泉町 野口氏	小浜丘之図(民具)	1点
58. 6. 1	市内泉町 野口氏	米ビツ	1点

国立歴史民俗博物館を見学して

当郷土館で学習している古文書読習会は、創立10周年を記念して、去る5月26日(木)、国立歴史民俗博物館を見学した。この旅行に、私達館職員2名と楽寿園職員1名が、同行させてもらった。

当日、昨夜来の雨も上がり、(気温が少々低かったが)素晴らしい天候に恵まれた。

バスは、28名乗の小型観光バスで、ペテランガイドの案内の声も心地よく、東名高速、湾岸道路をぬけ、一路目的地に向った。

予定時刻の11時に、千葉県佐倉市の国立歴史民俗博物館に(以下「歴博」)到着した。

佐倉城址の緑豊かな環境、広大な敷地と延べ3万平方メートルという巨大な建築物に驚嘆した。そして、その建物内に一歩足を踏み入れたところ玄関ロビーが空港の国際線待合室を思わせるような広いスペースで、またまた驚かされた。

我々26名の団体は、展示場に歩を進めた。

第一展示場は、「日本文化のありほの」「稲と倭人」「前方後円墳の時代」等がテーマで、ここの展示

方法は学校の教科書的な通史中心でなく、その時代における重要な事柄に生活史を通して展示してあった。このため、そのテーマ毎の内容において深味があり、又歴史知識が深くない方でも、興味ある分野をじっくり見学できるよう構成されていた。

第二展示場は、「王朝文化」「東国と西国」「大名と一揆」等で、展示物の中でも「京都の町並」の復元模型は、前評判も高く、大変精密に製作されており、当時の風俗が一目でわかり、素晴らしい展示物であった。

展示資料は、多くの復元模型、レプリカを使用し、照明施設効果も良かったため、歴史博物館によくありがちな、古めかしさや暗いイメージを受けなかった。まだ、第三展示場の展示が行われていない事や、テーマ中心の展示であるため、全体的にスッキリした感じを受けた。ただ、見学後に強く印象に残るジオラマ、復元模型が思い浮かぶ。

二時間半の見学が終り、城下町佐倉の町並を散策後、三島への帰途についた。(梅田館長)



一国立歴史民俗博物館前にて

■編集後記■

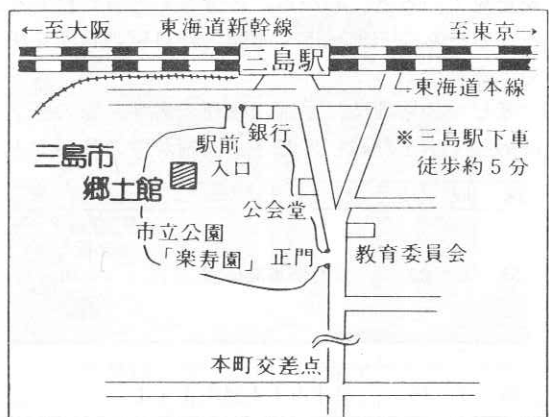
博物館には古いものがただ並んでいるというイメージが出来上がってしまっている。これは館を設置する人達の考えの中に問題があり、こうした考えから早く脱出しなければならない。予算、人員、施設等は今日の市民の学習要求を満たすに充分なものとは言えない。それどころか市民要求のたかまりの中ではますますかけはなれた形だけのものになる危険すらある。「地方の時代」における博物館はその地域の文化の指標となるものである。三島市郷土館もこうした社会状況の中で文化水準の指標としての位置づけは大きい。(稲木)

利用案内

休館日 毎月第1月曜・12月27日～1月2日

開館時間 午前9時～午後4時30分

入場無料 (但し、楽寿園入園の際、有料)



郷土館だより No.16

昭和58年7月1日発行

(年3回発行)

編集 三島市郷土館
住所 〒411 三島市一番町19-3
TEL.0559-71-8228
発行 三島市教育委員会